

ISSN 2433-7013

日本リハビリテーション教育学会誌  
第7巻 特別号2号 2024年

第22回 日本リハビリテーション教育学会学術大会  
大会テーマ:「未来に紡ぐ医療者教育」

日時:2024年12月21日(土)

会場:国際医療福祉大学 東京赤坂キャンパス 3階304教室

(住所:東京都港区赤坂 4-1-26)

大会長:西郡 亨 (上尾中央医療専門学校)

NPO:Rehabilitation Academic center (RAC)

The Society of Japan Rehabilitation Education

第22回日本リハビリテーション教育学会学術大会(東京赤坂)  
テーマ:『未来に紡ぐ医療者教育』

2024年12月21日(土)

国際医療福祉大学 東京赤坂キャンパス(東京都港区赤坂 4-1-26)

ZOOM 情報:

<https://us02web.zoom.us/j/81034934597?pwd=awFulpZ4oZpNOncQFbUdWrJTUwk7tp.1>  
(10:00より入室可)

ミーティング ID: 810 3493 4597 パスコード: kyoiku1221

◆ 開会 堀本ゆかり(日本リハビリテーション教育学会)

10:20 一般演題 I (口述発表) 座長: 国際医療福祉大学 小野田 公

1. 臨床実習指導者が捉える指導上の困難と効果的な指導方法の検討  
—作業療法士へのアンケート調査から—  
茨城県立医療大学附属病院リハビリテーション部作業療法科 富田 香織・・・1
2. 女性リハビリテーション専門職種における尿失禁とヘルスリテラシーの調査  
東海大学医学部附属病院 濱田 理沙・・・2
3. 実地指導者が認知するストレスの実態調査—実地指導者に対する環境的支援の検討—  
医療法人社団慈誠会 上板橋病院 リハビリテーション科 尾崎 麻美・・・3

11:00 一般演題 II (口述発表) 座長: 国際医療福祉大学 医学部 後藤 純信

4. 理学療法学生を対象とした地域理学療法実習におけるイメージの変化—栃木県養成校1校の調査—  
国際医療福祉大学塩谷病院 大久保玲菜・・・4
5. 筋萎縮性側索硬化症患者の身体機能, 日常生活活動に対する遠隔リハビリテーションの効果  
: スコーピングレビュー  
大阪大学医学部附属病院 リハビリテーション部 加藤 直樹・・・5
6. 中堅療法士のキャリア・プラトール及びワーク・エンゲイジメントに影響を与える要因の検討  
地方独立行政法人 長崎市立病院機構 長崎みなとメディカルセンター 川野 志起・・・6
7. メタバースを活用した医療系イベントにおける学習体験の評価  
健愛会あきやまクリニック 虎 一真・・・7

13:00 特別講演 『非認知能力の教育的応用』

講師: 早稲田大学 文学学術院 教授 小塩 真司先生  
司会: 上尾中央医療専門学校 西郡 亨先生

◆ 閉会 西郡 亨(第22回日本リハビリテーション教育学会 大会長)

## ◆一般演題

### 臨床実習指導者が捉える指導上の困難と効果的な指導方法の検討

#### —作業療法士へのアンケート調査から—

富田香織<sup>1, 2)</sup> 小野田公<sup>3)</sup> 堀本ゆかり<sup>3)</sup>

1) 茨城県立医療大学付属病院リハビリテーション部作業療法科

2) 国際医療福祉大学大学院 医療福祉教育・管理分野 修士課程 3) 国際医療福祉大学大学院

【研究目的】作業療法士教育課程において必要な科目として「臨床実習」が定められているが、臨床実習において、学生や事例、実習指導者の負担の増大などの問題が指摘される。臨床実習指導において、指導がうまくいかず困ったことや負担に感じる指導者も少なくない。そこで、作業療法士が臨床実習指導で実習指導者が思う問題・困難および効果的な指導方法を明らかにすることを目的とした。なお、本研究において「困難」とは、「困った」の他に「大変」「迷った」「難しい」という意味の内容も含むものと定義した。

【方法】茨城県立医療大学付属病院に勤務する臨床実習指導者講習会を修了した作業療法士 17 名を対象とし、Google Forms を使用した Web アンケート調査を実施した。アンケート項目は、基本属性（性別、経験年数、主たる指導者として担当した学生人数）及び、質問項目（①臨床実習指導の自信の程度、②臨床実習指導の負担の程度、③実習において問題と感ずること、④困難と感じた事例、⑤効果的や上手くいった指導方法・内容、⑥改善した方がいいと感じる指導方法・内容、⑦理想的な臨床実習）とした。統計解析方法は、基本属性の性別と主たる指導者として担当した学生人数は割合、経験年数は、基本統計量を算出した。選択回答は、段階ごとの合計と割合を算出した。自由記載の内容は、Berelson の内容分析を用いて「臨床実習指導で感ずる困難や問題」（以下、A 指導上の困難・問題）と「効果的な良い実習指導と指導上の工夫」（以下、B 効果的な指導・工夫）に分けて抽出、分析した。

【倫理的配慮】研究協力者には、文書を用いて口頭で説明を行い、アンケート上で研究協力の同意を確認した。本研究は、国際医療福祉大学倫理委員会の承認（承認番号：24-TA-006）を得て実施した。

【結果】研究協力者は 14 名（有効回収率 82.3%）であった。性別は男性が 7 名（50%）と半数を占め、主たる指導者として担当した学生の人数は、10 人以上が 7 名（57.1%）と最も多く、経験年数は平均 19.1±7.3 年であった。実習指導において 10 名（71.4%）が指導にあまり自信がなく、9 名（64.3%）が指導することにより負担を感じていた。質問項目③～⑦は、実習指導者の感ずる「A 指導上の困難・問題」と「B 効果的な指導・工夫」に該当する内容に分けて抽出し、サブカテゴリーからカテゴリー形成した。「A 指導上の困難・問題」として 13 のカテゴリーが形成された。最も単位数の割合が高かったカテゴリーは、【A③指導者としての資質や指導力に関する問題】の 27.4%であり、次いで【A①学生の情意面、実習態度、実習姿勢の問題】の 16.4%であった。「B 効果的な指導・工夫」として 12 のカテゴリーが形成された。最も単位数の割合が高かったカテゴリーは、【B⑩望ましい臨床実習体制・実習方針】の 20.0%であり、次いで【B④学生の学習姿勢や動機づけを高める指導】の 17.8%であった。

【考察】実習指導者の感ずる「A 指導上の困難・問題」と「B 効果的な指導方法・工夫」においてカテゴリーの一致がみられた。また、本研究においては「A 指導上の困難・問題」に対して「B 効果的な指導・工夫」のカテゴリーが重複するものが多かった。困難に対する実習指導者の対応や指導の工夫を「B 効果的な指導・工夫」のサブカテゴリーを参照することで提案できるのではないかと考える。

## 女性リハビリテーション専門職種における尿失禁とヘルスリテラシーの調査

濱田 理沙<sup>1,2)</sup> 久保 晃<sup>3)</sup> 渡邊 観世子<sup>3)</sup>

1) 東海大学医学部附属病院

2) 国際医療福祉大学大学院 医療福祉教育・管理分野 修士課程 3) 国際医療福祉大学大学院

【研究目的】尿失禁は女性に特有の問題とされ、その背景には加齢や妊娠・出産の影響が報告 (ManLennan, 2000) されている。尿失禁に関する調査は高齢者に焦点を当てたものが多く、生産年齢期の実態は十分に明らかになっていない。特にリハビリテーション (リハビリ) 専門職種は腹圧のかかる動作が多いことやトイレに行きにくい業務環境から尿失禁の発症リスクが高いことが予想される。またリハビリ専門職種はヘルスリテラシー (HL) が高いことが想定されるが、尿失禁に関する情報の把握状況について明らかでない。本研究では女性リハビリ専門職種における尿失禁の有訴率とその背景因子、一般的な HL と尿失禁に対する知識を明らかにすることとした。

【方法】一般病院に勤務する女性リハビリ専門職種を対象とした無記名の web アンケートを実施した。調査項目は基本属性、業務日および休日の日中のトイレの回数、泌尿器系・婦人科系疾患や腰痛および股関節痛の有無、月経周期、出産情報とした。尿失禁に関しては ICIQ-SF (International Consultation on Incontinence Questionnaire-Short Form) により尿失禁の重症度、KHQ (King's Health Questionnaire) により排尿障害に関する QOL を聴取した。また HLS-EU-Q47 (European Health Literacy Survey Questionnaire 日本語版) で一般的な HL と尿失禁の予防・改善に関する知識 (尿失禁リテラシー) について聴取した。解析は尿失禁の有訴率の集計、尿失禁の有無による特性の比較、尿失禁に関連する QOL に影響を与える要因の検討とした。

【倫理的配慮】本研究は国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認 (24-TA-015) を得て実施した。

【結果】75 名 (年齢  $32.8 \pm 9.1$  歳) の解析データを得た (有効回答率: 98.7%)。尿失禁症状があると回答したのは 38 名 (51%, 年齢  $35.8 \pm 9.9$  歳) で、軽症 (79%) および腹圧性尿失禁 (64%) が多かった。尿失禁あり群は年齢、出産回数、経産分娩や会陰切開の割合が有意に高かった ( $p < 0.05$ )。さらに業務日および休日の日中のトイレの回数が有意に多く ( $p < 0.05$ )、業務日は休日よりも有意に少なかった ( $p < 0.05$ )。KHQ では「全般的健康感」と「個人的な人間関係」以外の領域で有意に得点が高かった ( $p < 0.05$ )。HLS-EU-Q47 と尿失禁リテラシーに有意差はなく ( $p > 0.05$ )、骨盤底筋群トレーニングの実施経験は尿失禁あり群に多かった ( $p < 0.05$ )。KHQ に影響を与える要因は「個人的な人間関係」の領域に対して休日の日中のトイレの回数 ( $\beta = 0.32$ ) が抽出され ( $R^2 = 0.09, p < 0.05$ )、それ以外の領域では ICIQ-SF が抽出された。

【考察】本研究での女性リハビリ専門職種の尿失禁有訴率は、若年・中年の日本人を対象とした調査 (25.5%: Onishi, 2023) よりも高かった。尿失禁有訴者の特徴としては年齢や出産の他、日中のトイレの回数が多い反面、業務日には有意に少ないことが分かり、トイレに行きやすい環境づくりが必要と考える。HL は一般人よりも高値を示したが、骨盤底筋群トレーニングの実践経験は尿失禁あり群に多かったことから、予防的な取り組みの啓蒙が必要である。また尿失禁症状が重症であるほど尿失禁に関連する QOL が低いことから、尿失禁の予防・改善への職場管理対策の重要性が示された。

# 実地指導者が認知するストレスの実態調査—実地指導者に対する環境的支援の検討—

尾崎麻美<sup>1,2)</sup> 小野田公<sup>3)</sup> 堀本ゆかり<sup>3)</sup>

1) 医療法人社団慈誠会 上板橋病院 リハビリテーション科

2) 国際医療福祉大学大学院 医療福祉教育・管理分野 修士課程 3) 国際医療福祉大学大学院

## 【研究目的】

理学療法士（以下PT）の新人教育は多くの問題点が指摘されている。教育体制の整備が十分でない環境で、実地指導者は多大なストレスを抱えている可能性があると考えられた。そこで、実地指導者のストレスの実態に関する調査を行い、実地指導者が望む環境的な支援を明らかにすることとした。

## 【方法】

医療法人社団慈誠会グループに勤務し、令和6年度に実地指導者を担ったPTを対象にwebアンケート調査を行った。本研究では実地指導者を「OJTの仕組みで新人PT職員に技術、知識など指導をする者」と定義した。調査内容は基本属性、新人教育体制、職業性ストレス簡易調査票(57項目)、ストレスの自覚の程度(10段階)、ストレスの内容、環境整備の要望とした。職業性ストレスはストレスの自覚の程度(10段階)の中央値で低ストレス群と高ストレス群に分け、Mann-WhitneyのU検定を行った。ストレスの内容、環境整備の要望のテキストデータをSCAT(Step for Coding and Theorization)にて分析した。

## 【倫理的配慮】

本研究は国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:24-TA-049)。対象者には文書で研究の目的、アンケートの所要時間、研究の参加は自由意志であること、不参加でも不利益が生じない旨を説明した。

## 【結果】

18名から回答を得た。経験年数は $10.9 \pm 5.1$ 年であり、10年以上が10名(55.6%)と半数以上を占めていた。ストレスの自覚の程度の結果は大きくばらついた。高ストレス群は、仕事の量的負担、職場環境によるストレス、ストレス反応が有意に高く、仕事のコントロール度、上司や同僚からのサポート、仕事や家庭の満足度が有意に低かった。ストレスの内容は、『指導者としての不安』『新人との対人ストレス』『役割の曖昧さ』『仕事の質的負担・役割葛藤』『仕事の量的負担・時間管理の難しさ』のグループに分けられ、13のカテゴリーから構成された。環境整備の要望は【基盤となる環境】【新人の働きやすい環境】の2つのテーマに分けられた。【基盤となる環境】を前提に、【新人の働きやすい環境】づくりが行われることが示された。【新人の働きやすい環境】は【実地指導者と他のスタッフが協力する仕組み】【実地指導者と新人の継続的な支援ができるスタッフ】【新人への支援】【実地指導者への支援】の4つのカテゴリーと21のサブカテゴリーから構成された。

## 【考察】

高ストレス群において仕事の量的負担が有意に高かったこと、ストレスのグループの1つが『仕事の量的負担・時間管理の難しさ』であったこと、【実地指導者への支援】が〈自身の業務に取り組む時間の確保〉等のサブカテゴリーから構成されていたことから、実地指導者を兼務することによる業務時間の増大が課題の一つであると考えられた。忙しく、さまざまなストレスを抱える実地指導者を支援するためにも、幅広い視点からの職場環境の整備が必要である。

# 理学療法学生を対象とした地域理学療法実習におけるイメージの変化

## - 栃木県養成校 1 校の調査 -

大久保玲菜<sup>1,2)</sup> 堀本ゆかり<sup>3)</sup> 金子秀雄<sup>3)</sup>

1) 国際医療福祉大学塩谷病院 しおや総合在宅ケアセンター

2) 国際医療福祉大学大学院 医療福祉教育・管理分野 修士課程 3) 国際医療福祉大学大学院

### 【研究目的】

2020 年度に理学療法士・作業療法士学校養成施設指定規則が改正・適用され、通所リハビリテーション（以下、通所リハ）または訪問リハビリテーション（以下、訪問リハ）に関する臨床実習（地域理学療法実習）が義務化された。理学療法学生の卒業後の進路は病院関係への就職が多く、地域理学療法分野へ卒業後すぐに就職する学生は少ない。地域理学療法実習により地域理学療法分野への就業意識を高めることに繋がるかどうかは不明である。そこで、本研究の目的は地域理学療法実習前後に地域理学療法へのイメージがどのように変化するかを明らかにし、地域理学療法分野への就業意識がある学生の特徴を探ることとした。

### 【方法】

対象は地域理学療法実習を実施した国際医療福祉大学理学療法科学部生の 3 年生 72 名とした。方法は質問紙を用いた横断的調査とし、調査内容は地域理学療法実習と地域理学療法士への印象、医療保険と介護保険領域での理学療法の違いへのイメージ、通所リハまたは訪問リハへの就業意識、実習への満足度、実習施設の特徴と介護保険への理解度などとした。回答は 5 段階リッカート尺度を用いた。統計解析は、実習前後の変化を Wilcoxon の符号付順位検定で比較し、通所リハまたは訪問リハへの就業意識がある群とない群では満足度、印象、理解度に違いがあるのか Mann-Whitney の U 検定で比較した。有意水準は 5% とした。なお、本研究は国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 24-TA-007）

### 【結果】

記載不十分や研究の同意が得られなかったものを除いた理学療法学生 45 名を対象に分析をした。地域理学療法実習前後の比較について、「地域理学療法実習への印象は良いか」、「地域理学療法士への印象」、「医療保険と介護保険領域での理学療法の違いをイメージできるか」、「通所リハまたは訪問リハで働きたいと思うか」の項目が有意に向上した。また、就業意識のある群はなし群と比べ、「地域理学療法実習への満足できたか」、「地域理学療法実習への印象は良いか」、「地域理学療法士への印象は良いか」、「実習施設の特徴への理解は深まったか」、「介護保険への理解は深まったか」の項目が有意に高かった。

### 【考察】

理学療法学生は地域理学療法実習前後で地域理学療法へのイメージが改善し、就業意識がある学生は実習への満足度が高く、実習と地域理学療法士への印象、実習施設の特徴と介護保険への理解度が向上するという特徴があることがわかった。地域理学療法実習により就業意識が改善しているため、今後は、卒業時まで地域理学療法分野への就業意識を保つことが求められる。同分野への就業意識を向上させるために、興味を持つきっかけを作ることが必要であり、地域理学療法実習への印象、実習施設の特徴と介護保険に対する理解度を高める工夫が必要であることが示唆された。

## 筋萎縮性側索硬化症患者の身体機能，日常生活活動に対する遠隔リハビリテーションの効果 ：スコーピングレビュー

加藤 直樹<sup>1,2)</sup> 金子 秀雄<sup>3)</sup> 堀本 ゆかり<sup>3)</sup>

1) 大阪大学医学部附属病院 リハビリテーション部

2) 国際医療福祉大学大学院 医療福祉教育・管理分野 修士課程 3) 国際医療福祉大学大学院

【研究目的】筋萎縮性側索硬化症（ALS）は進行性の神経変性疾患であり，症状の進行に伴い移動が困難になる．そのため，医療機関でリハビリテーション（リハ）を受けることが難しくなり，リハのアドヒアランスが低下する．近年，遠隔医療が急速に普及し，リハ領域でも活用され始めている．他の神経変性疾患では，遠隔リハがアドヒアランスを向上させ，身体機能や日常生活活動（ADL）を改善することが報告されている．しかし，ALS 患者を対象とした研究は少なく，その効果は明らかでない．本研究では，ALS 患者に対する遠隔リハが身体機能，ADL に及ぼす効果について文献レビューを行い，先行研究の知見を統合することを目的とした．

【方法】神経変性疾患に対する遠隔リハの先行研究をもとに検索式を作成し，PubMed，Scopus，Web of Science，ProQuest，CiNii，医学中央雑誌，Magazine Plus を用いてスコーピングレビューを実施した．採用文献から，研究デザイン，介入内容，遠隔リハの方法，アドヒアランス，効果，有害事象，患者満足度に関する情報を抽出した．

【倫理的配慮】本研究は既存の文献を対象としたスコーピングレビューであり，新たなデータ収集や介入を伴わないため倫理審査を受けていない．但し，採用文献が倫理的に適切に実施されたことを確認した．

【結果】検索の結果，5 件の文献が採用され，採用文献の研究デザインは，症例集積研究または症例対照研究であった．介入方法は，呼吸リハ，有酸素運動，ストレッチ，包括的理学療法であり，遠隔リハの方法は，ビデオでの対話，遠隔機器によるモニタリング、オンデマンド形式のビデオ指導など様々であった．アドヒアランスは，脱落率が 0～21%，遵守率が 90～121%であり，呼吸リハでは呼吸機能や ADL が有意に改善した．患者満足度は高く，満足度が低かった項目として，機器の操作性，費用，対面と同等の診療の質が挙げられた．

【考察】本研究の結果，ALS 患者に対する遠隔リハは高いアドヒアランスを示し，特に呼吸リハでは身体機能や ADL の改善効果が示唆された．アドヒアランス向上の要因として，遠隔モニタリングによる運動強度の調整やオンデマンド形式の指導による時間制約の緩和により，リハを継続することができたと考えられた．呼吸リハは診療ガイドラインで推奨されており，また，大がかりな器具を必要とせず遠隔リハに適応しやすいために有効であったと考えられた．本研究の結果から，ALS 患者の身体機能や ADL を維持・改善する上で遠隔リハは有用な手段となる可能性が示された．しかし，研究の数が少なく，得られた知見は限定的であったため，今後さらなる質の高い研究が求められる．

## 中堅療法士のキャリア・プラトー及びワーク・エンゲイジメントに影響を与える要因の検討

川野 志起<sup>1,2)</sup> 金子 秀雄<sup>3)</sup> 堀本 ゆかり<sup>3)</sup>

- 1) 地方独立行政法人 長崎市立病院機構 長崎みなとメディカルセンター
- 2) 国際医療福祉大学大学院 医療福祉教育・管理分野 修士課程
- 3) 国際医療福祉大学大学院

【研究目的】本研究の目的は、中堅療法士におけるキャリア・プラトーおよびワーク・エンゲイジメントに影響を及ぼす要因を特定し、それらの影響を緩和し、ワーク・エンゲイジメントを向上させるための知見を得ることである。

【方法】臨床経験 6～20 年目の理学療法士，作業療法士，言語聴覚士 115 名を対象に，Google Forms を用いて無記名の Web アンケート調査を実施した．測定項目には，個人属性，組織属性，ワーク・エンゲイジメント（ユトレヒト・ワーク・エンゲイジメント尺度），個人の資源（一般性セルフ・エフィカシー尺度，日本語版 short Grit 尺度），仕事の資源（仕事の強みチェックリスト），キャリア・プラトー（キャリア・プラトー化尺度）が含まれた．これらのデータをもとに重回帰分析を行い，キャリア・プラトーおよびワーク・エンゲイジメントに影響を与える因子を検討した．

【倫理的配慮】本研究は国際医療福祉大学倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号第 24-KS-007 号）．対象者には書面で研究目的や，研究方法，個人情報の保護，研究に同意できない場合にも不利益が生じないこと等を説明した．

【結果】キャリア・プラトーにおいて，階層プラトーの促進因子には，個人属性（協会加入）や組織属性（施設の規模）が挙げられた．一方，抑制因子としては，個人属性（最終学歴）や個人の資源（自己効力感）が確認された．内容プラトーに関しては，抑制因子として個人属性（教育関連資格，女性，扶養家族）や仕事の資源（職場風土・職場環境）が影響を及ぼしていたが，促進因子は特定されなかった．ワーク・エンゲイジメントの促進因子としては，個人属性（職位），個人の資源（自己効力感）に加え，Grit と仕事の資源の交互作用が確認された．抑制因子には扶養家族および内容プラトーが含まれていたが，内容プラトーの影響は他の因子と比較して小さいことが示された．

【考察】個人の資源（自己効力感，Grit）や仕事の資源を積極的に活用することで，キャリア・プラトーの影響を緩和し，ワーク・エンゲイジメントを向上させる可能性が示唆された．特に，Grit が低い療法士には，Grit を高めるための特別な支援や学習機会の提供が不可欠であり，それによって長期的な目標達成に向けた根気強さを育むことが期待できる．また，扶養家族がキャリア・プラトーおよびワーク・エンゲイジメントに対して抑制因子としてはたらくことが確認された．そのため，子育て世代の療法士に対しては，家庭での時間的制約や役割負担を十分に考慮し，家庭生活との両立を支援する仕組みを整備することが求められる．さらに，家庭で培った時間管理や問題解決能力といったスキルを活かせる業務や役割を提供することで，自己効力感を高めるとともに，仕事への意欲を維持し，ワーク・エンゲイジメントをさらに向上させることが可能であると考えられた．



## メタバースを活用した医療系イベントにおける学習体験の評価

虎 一真<sup>1)</sup> 百崎 良<sup>2)</sup> 白井 祐佳<sup>3)</sup> 坂本 良太<sup>4)</sup>

- 1) 健愛会あきやまクリニック 2) 三重大学大学院 医学系研究科リハビリテーション医学分野  
3) 浜松医科大学医学部附属病院栄養部 4) 三重大学医学部附属病院 医療情報管理部

【背景】 医療分野におけるメタバースの活用は、教育や交流の新たな可能性を提供している。特にリハビリテーションや栄養学を対象としたイベントでは、専門家や学生がバーチャル空間内で学び合う機会が増えているが、その学習体験の質は十分に検証されていない。

【目的】 本研究は、メタバースを活用した医療系イベントに参加したユーザーの学習体験を評価し、バーチャル空間での学びの有効性と課題を明らかにすることを目的とする。

【方法】 2024年にメタバース Cluster で開催された「バーチャルリハビリテーション栄養学会」参加者の学習体験を調査した。評価には User Experience Questionnaire (UEQ) を採用した。7段階 26項目を評価し、データを以下の6尺度に集約した。: ①見栄え、②明快さ、③効率、④信頼性、⑤刺激、⑥新奇性。データはアンケート形式で収集し、定量的分析と定性的分析を組み合わせで検討した。

なお、本研究は倫理的配慮として、調査の目的と方法を参加者に事前に説明し、自由意思に基づく同意を得たうえでデータを収集した。また、個人が特定される情報は一切収集せず、結果は匿名化して統計的に処理した。

【結果】 バーチャルリハビリテーション栄養学会の参加者のうち68名から回答を得た。回答者のうち64.7% (44名) が医療関連職であった。UEQの評価では見栄え、信頼性、刺激、新奇性の4項目は「Excellent」、明快さと効率の2項目は「Good」であり6項目すべてにおいて高い体験評価が得られていた。一方で、一部の参加者からはデバイスのバッテリー駆動時間の不足など「①技術的な課題」や、「②操作に慣れるまでの負担」、アバターの位置によるスライドの見にくさなど「③視認性の課題」が指摘された。

【考察】 メタバースを活用した医療系イベントは、学習体験の質を向上させる可能性が高い一方、技術的な課題への対応が必要である。本研究の結果は、バーチャル空間での学習体験の設計における指針を提供するとともに、今後のイベント開催における改善点を示唆するものである。

【結論】 メタバースを活用した医療系イベントは、効果的な学習環境を提供する可能性があるが、技術的なサポートや参加者への事前準備が成功の鍵となる。本研究は、バーチャル空間を用いた学びの新しい可能性を示唆するものである。

◆特別講演

『非認知能力の教育的応用』

講師：早稲田大学 文学学術院 教授 小塩 真司先生  
司会：上尾中央医療専門学校 西郡 亨先生

\*資料は、ZOOM のチャット機能で配信予定